

タ リ タ ・ ク ム

# “Talitha, kum”

「少女よ、わたしはあなたに言う。起きなさい」(マルコ5:41)

発行:日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第 11 号

2009年1月20日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町 65

日本聖公会管区事務所気付

正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

Tel.03-5228-3171

発行責任者: 大岡左代子

## わたしたちの教会が さらに豊かなパートナーシップへの道のりを共に歩いていくために

—日本聖公会女性の司祭按手 10 年感謝プログラムをふりかえって—

司祭 山野繁子 (東京教区)

### ＜原点に返って＞

12月2日(火)の朝は快晴で、穏やかな日差しが降り注いでいました。名古屋聖マタイ教会で11時から感謝の聖餐式、1時から交流会が行われました。聖餐式では特別に用意された特祷、イザヤ書6:1～8、詩篇138編、コリントⅡ5:16～21、ヨハネ福音書16:20～24が用いられました。

岡村トシ子司祭(北海道教区)はご自身が、どれほど多くの人々に祈られ、励まされて神の招きに応えられたかを語られました。渋川良子先生からのメッセージに「あの時から10年が経ちました。」と、ありました。それまで20年間、執事として仕えられた先生が、司祭としての第一歩を踏み出されたこの同じ礼拝堂は、この日もとても美しく飾られていました。礼拝では、一つひとつの祈りと聖歌の言葉が新たに感じられ、とても新鮮でした。「ああ、もしかしたら、夢を見ているのかもしれない。それとも、気づかないうちに神さまの近くに来てしまったのかも…」とさえ感じていました。

式後の交流会では、前日に全国から集まった女性の教役者20人が、一言ずつの自己紹介をしました。北海道教区から沖縄教区まで、皆が一同に集まったことは初めてでした。按手の日から今日まで、目の前にある働きをどう果たしていくか、試行錯誤と全力投球の日々だったからです。初めて一歩立ち止まって、これまでの歩みをふりかえる時が与えられました。

### ＜これからの道のり＞

「さらに豊かなパートナーシップへ」と、わたしたちの教会は開かれていくことを信じています。それがどのような形でやってくるのか、まだわたしたちには分かりません。教会がこれまで声を聞くことの少なかった人々、性的少数者の方々、さまざまな「生きにくさ」を負って生きる人びとと一緒に考え、共に変えられていくことを大切にして、わたしたちの教会が「未来の人類社会のひな形を示す責任」を果たしていけるように努力していきたいと思います。教会がなお開かれることに向けて、皆さまと希望をつないで進んでいきたいと願います。

# 女性の司祭按手10年 感謝プログラム概要

報告：井田涼子・木川田道子(感謝プログラム事務局)

今回のプログラムの主旨は「女性の司祭按手の実現によって女性が教会のミニストリーにより深く参与することができるようになり、10年を迎えたことを教役者、信徒ともに感謝し、これまでの経験を分かち合い、さらに今後へ向けたヴィジョンを見出したい」ということでした。この主旨に対して、主教、教役者、団体長、グループの代表など31人(件)の呼びかけ・賛同人(団体)、約150件の協賛と中部教区センターはじめさまざまな方々のご協力を得て、実行委員会形式で行いました。また今回のために、大韓聖公会からチェ・ユンチェ執事、キム・ソンヒ執事にゲストとしておいでいただくことができました。三つの内容から成った今回のプログラムを少しだけご紹介します。

## ◆ リトリートと分かち合い 12月1～2日

於：名古屋南山学園研修センター

これまでなかなか一同に会する機会のなかった現職・退職者の女性の教役者18人と大韓聖公会からの2人のゲストが参加し、黙想のひととき(指導 小貫ツマ司祭)を持った他、夜には分かち合い(担当 吉岡容子司祭)が行われました。(現在日本聖公会には現職の女性の司祭が11人、執事3人、聖職候補生6人、退職司祭4人がおられます)



## ◆ 感謝礼拝と交流会 12月2日 於：名古屋聖マタイ教会

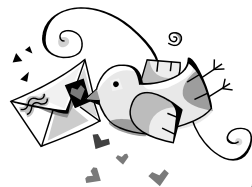
翌日は会場を名古屋聖マタイ教会に移し、中部教区の方々はじめ、沖縄～北海道から駆けつけて来てくださった約100人の方々と共に、感謝礼拝(司式 森紀旦主教、説教 岡村トシ子司祭)をささげることができました。引き続き行われた交流会では、中部教区センターのスタッフの方が準備していただいたおいしい昼食を囲みながら、三木メイ執事(京都教区)と木村タ子司祭(北海道教区)司会のもと、教役者の自己紹介、この日に寄せられたメッセージの紹介が行われました。また映像を使って、日本聖公会におけるこれまでの女性の宣教師や婦人伝道師の働き、戦前10校以上もあったという女子神学校の紹介、日本聖公会で初めての女性の執事按手、司祭按手までの歩みについて振り返りました。



## ◆ 記念冊子の作成 継続中

現在、編集委員5名で、今回のプログラムの記録を編集作業中です。この冊子はプログラム当日の記録ですが、冊子発行をきっかけにこれまであまり整理されてこなかった各教区出身の婦人伝道師の方々の働きについて情報収集を進めることができれば、と話し合っています。1月末の発行を目指しています。

## 女性の教役者たちのメッセージ—交流会自己紹介より



◇執事になって6年目。女性の司祭按手が実現した今だからこそ、執事としての働きについて時間をかけて考えてみたいと思います。

執事 佐久間恵子（東京教区聖マリア教会牧師補）

◇夢を見ているような昨日、そして今日一日。このような時がやってくるとは考えられなかった10年前。今日このように皆さんと感激を分かち合えることをうれしく思い、ここにいます。

司祭 笹森田鶴（東京教区 神愛教会教会牧師）

◇この3年間で勉強させていただき、私は恵まれているなと思っています。これから、各教区で女性が出て行けるような道が拓かれますように。私は今「主の道を整えよ」という言葉を心に描いています。

執事 三浦恵子（京都教区 平安女学院大学高槻キャンパス チャブレン）

◇2009年、日本聖公会宣教150年のお祝いが計画されています。日本聖公会が150年ということは、ウィリアムズ主教が長崎に上陸されたところを起点としていますので、九州教区が150年ということです。是非そのことを憶えてください。特に今日は、ウィリアムズ主教逝去記念日で、その日にこの時を迎えられたことを感謝いたします。先ほどの礼拝の代祷で祈られましたモニカ石田みち子司祭は、一昨年の11月の教区会の時に按手を受けられましたが、7月に肺癌がわかり、わずか1ヶ月の闘病で天に召され、九州教区に女性の教役者として疾風のように現れて疾風のように去っていかれました。彼女が天に召されたことは大きな悲しみでしたが、神さまは女性の聖職を天に召したいと考えられたのだと、九州教区に女性の教役者として一人残された私は、自分に言い聞かせています。九州教区に女性の聖職が与えられることをお祈りください。

司祭 吉岡容子（九州教区 宮崎聖三一教会牧師）

◇自分に対しても、他人に対しても、「私は勉強したいだけ。聖職になるなんてとんでもない」と言い訳をしながら、1982年に 聖公会神学院に入学しました。それから約25年後の日本聖公会において、今日のように女性司祭が前にずらりと並ぶような「夢のような事」が実現するとは、誰が想像したのでしょうか。今日ここに来ることができた私たち、そして来ることができなかったたくさんの人たち、また全く沈黙のうちに消されていった人々等、たくさんの方の祈りによって実現したのだと思います。これからも神さまとたくさんの人たちのために、尽くしていきましょう。

司祭 上田亜樹子（ハワイ教区より東京教区出向 立教大学チャブレン）

◇今年5月の牧師任命式で「管理」がとれて牧師として独り立ちしました。これまで求めながら、泣きながら、今日のような日が来ることをひたすら祈ったことが、走馬灯のように頭の中を巡ります。これからも、次々に女性たちが神さまに招かれ



で勉強できる状況が広がっていくことを願っています。

**司祭 神崎和子**（東京教区 大森聖アグネス教会牧師）

◇今日の感謝礼拝はとても感慨深く、喜びが胸に込み上げてきました。女性の司祭按手が実現するまでの10年間、共に苦しみと痛みを担いながら歩んでくださったお一人おひとりを、感謝をもって思い起こしています。心から「ありがとうございました」と申し上げたいと思います。

**執事 三木メイ**（京都教区 大津聖マリア教会主日勤務、同志社大学キリスト教文化センター教員・チャプレン）

◇礼拝の説教でお話した以外に、私にはもう一人励まされていた方がいますので紹介します。もう亡くなられましたが、網走の教会の熱心なご高齢の信徒の方でした。礼拝後の会食席でいつも私に「牧師の説教は下手だ！坊主の説教は上手いぞ！」と、毎週そのような励ましの言葉をくださいました。でも毎週言われると暗示にかかっちゃうんですね。（笑）今日の礼拝で私の説教を植松主教がお聞きになっていて、逃げ出すんじゃないかという気持ちでした。（笑）

**司祭 岡村トシ子**（北海道教区退職聖職）

◇今振り返ると、神さまのすばらしい奇跡のように思います。長い間日本で働きましたが、今日のような日が来るとは思いませんでしたので、感謝と喜びでいっぱいです。来年定年を迎え、イギリスに帰ります。イギリスでは、神さまに感謝しながら牧会を続けるつもりです。

**司祭 パメラ・A・クーパー**（大阪教区 庄内キリスト教会牧師 プール学院大学チャプレン）

◇私が執事に按手されたのが1998年5月です。その時には、まだ女性は司祭にはなれませんでしたので、執事となってがんばろうと考えていました。その年に女性の司祭が認められました。私が司祭に按手されたのが2001年です。この年は「9・11」という大きな出来事がありました。1998年の執事按手、2001年の司祭按手どちらも大きな出来事があった年でした。私は神学校入学当初、聖職になるつもりはありませんでした。しかし、いろいろな方に出会い、押し出していただいたように思います。女性男性ではなく、一人でも多くの方が教役者の道へ押し出されることを祈ります。

**司祭 池本則子**（京都教区 桑名エピファニー教会、四日市聖アンデレ教会牧師）

◇私は牧師の妻でしたが、突然の夫の死によって、押し出されて伝道師となりました。執事になって15年、そして1999年に司祭按手されて3年、体調を崩して退職し、現在は東京に住んでいます。ご恩になった北海道を離れて申し訳ないと思いつつ、東京でも奉仕の機会を与えられていることを感謝しています。

**司祭 小貫ツマ**（北海道教区退職聖職）

◇聖職候補生の私は、担える仕事に限りがあるので、多くの人びとに役割分担いただき支えていただいています。私をありのままで受け入れていただいていることに心より感謝しています。今日、この女性たちの聖職の中に私も入ることができたことをとてもうれしく思い、多くの人に女性の司祭になってほしいというメッセージ

を伝えたい反面、神学校生活3年間の大変さ思い出すと…心の中で葛藤しています(笑)。しかし、多くの人びとの支えがあることは恵み。私自身これからもがんばっていきたいと思います。

聖職候補生 金善姫 (中部教区 松本聖十字教会勤務)

◇私は、日本聖公会の女性の司祭第1号の渋川先生より2年早く、司祭として按手されました。でも、今日ここに立つことができとてもうれしく思いますし、日本聖公会はとてもすばらしいと思っています。これからも皆さんのご支援を受けてやっていきたいと思っています。

司祭 後藤香織 (中部教区 名古屋聖マタイ教会副牧師)

◇10年前、日本聖公会で初の女性の司祭按手式に来ました。その時は韓国では女性の司祭按手がまだ認められておらず、とても苦しいときでしたので、日本で女性の司祭按手が認められたうれしい涙と、私たちはどうすればよいのかという悲しみの涙が混ざり合っていました。今、この場所にご一緒に立つことができ本当に感謝しています。

司祭 朴美賢 (沖縄教区 日曜学校担当牧師)

◇ここにいる人たちは、一人ひとり違っているのだなと感じています。私は3人目の子どもを神学生のときに産んで、周りの人たちに支えていただきながら、神学校で学ぶことができました。韓国をはじめ、ここに多くの人たちが集えたことを感謝します。一人ひとりが神さまからいただいた恵みを感じて、それに応えていけたら素敵だなと思います。

聖職候補生 下条知加子 (東京教区 月島聖公会勤務)

◇今日の礼拝は、原点にかえり、感動に包まれた礼拝でした。女性の司祭が誕生して10年ですが、ここに至るまでの何十年も、いろいろな方々の祈りがあり、この先私たちがそれぞれの場で生きていく中で、どのような10年になるのか考えています。今日は、多くの方とこのような祝いの会を持つことができ感謝しています。

司祭 山野繁子 (東京教区 東京諸聖徒教会牧師)

◇私が神学校に入った年に、女性の司祭への道が拓けました。そこに至る道に多くの方の涙と痛みと努力と祈りがあったことを、私はそのときまで知らずして過ごしていたのですが、今、選択肢の一つとして普通に司祭職が拓かれたことを、あらためて今日感謝いたしました。ありがとうございました。

司祭 木村タ子 (北海道教区 旭川聖マルコ教会牧師)

◇お招きいただきありがとうございます。これから男性や女性、国境をこえて、このような豊かな交わりが深まっていくことを望んでいます。

執事 金善姫 (大韓聖公会ソウル教区 外国人支援センター勤務 女性と子ども担当)

◇互いの状況を分かち合う中で、韓国と日本の女性たちが同様の経験をしていることに気づかされました。2011年は大韓聖公会の女性の司祭按手10周年ですが、韓国でもこれほど多くの人たちが喜んでくれるのかどうか、ちょっと心配になりました(笑)。

執事 崔允珠 (大韓聖公会 わかちあいの家勤務)



## 主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いですでしょう

ルカによる福音書 1:45

神さま  
あなたの不思議な力が  
わたしたちに先立って  
道を示してくださいように。  
あなたの光が  
わたしたちの上に輝き  
世界を照らしてくださいように  
わたしたちと共に歩む  
仲間をあたえてください。



今生きているすべてのものに  
若い人にも 年老いた人にも  
近くの人にも 遠い人にも  
知っている人にも 知らない人にも  
生きている人 世を去った人  
そして これから生まれてくる人にも  
すべてのものにあなたの喜びを満たしてください。

アーメン





## 共に祈って

古本靖久（京都教区 菰野聖マリア教会）

体は一つでも、多くの部分から成り、  
体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、  
キリストの場合も同様である。（コリントの信徒への手紙Ⅰ 12章 12節）

先日、名古屋の聖マタイ教会で行われた「女性の司祭按手 10 周年感謝礼拝」に参加する機会を与えられた。礼拝の中で、また祝会の中で、その司祭按手にいたる道のりとその後の苦しみや痛み、祈りの日々を聞かせていただいた。言葉だけでは語りきれないものがずっしりと伝わってきて、感謝であった。

プロテスタント出身の私にとって、「女性司祭」という言葉は違和感を覚えさせる。現在、私たち夫婦は JTJ 宣教神学校という所の通信プログラムにて学んでいるのだが、そこでは多くの女性たちがごく当たり前のように、牧師になるべく勉強をしている。彼女たちは、私たち男性と全く同じように神さまからの召命を受け、神さまのご用のために自分を用いていただくために自分自身を捧げている。

私たちキリスト者は、キリストのからだの一部として、その賜物を生かすようにと勧められており、そこには男女の区別など何もないはずである。そしてさらに、気配りや優しさといった多くの男性に足りないと言われる賜物を活かした女性たちが、司祭として多く誕生するならば、日本聖公会にとってどんなにプラスになることだろう。その力は計り知れない。

いつの日か、「女性司祭」という言葉は使われなくなり、性別を問わず、「司祭」と呼ばれる聖職がただ存在する日が、この日本聖公会にも来るように共に祈りたいと思う。

## シリーズ「聖書の中の女性たち」⑤

### 4人の娘 使徒言行録 21章8～9節

松原恵美子(大阪教区)

翌日そこをたって、カイサリアに赴き、例の7人の1人である福音宣教者フィリポの家に行き、そこに泊まった。この人には預言をする4人の未婚の娘がいた。

使徒言行録 21 : 8～9

パウロ書簡の中には多くの女性が登場します。リディア(使徒16:14)プリスカ(使徒18:2 他)エボディアとシンティケ(フィリピ4:2)フェベ(ローマ16:1-2)マリア(ローマ16:6)トリファイナとトリフォサと愛するペルシス(ローマ16:12)クロエ(Iコリント1:11)ユリア(ローマ16:15)ユニアス(ローマ16:7)ダマリ(使徒17:34)などの名が記されています。

しかし、その記述から、彼女たちが何者なのか、どのように初代教会と関わったのかはほとんどわかりません。ローマの信徒の手紙16章の挨拶に多くの女性の名が出てくることなどから、おそらく当時の教会の中において、彼女らが重要な役割や立場を担っていたと考えられますが、具体的なことはわかりません。

1992年から1999年、関西でNCCY関西 女性分科会(仮)というエキュメニカルな女性たちの集まりをほぼ月に1回、行っていました。私にとっては「女性が教会を考える会」と並んで大切な集まりでしたし、この2つの集まりがあったからこそ、今の私がいると思えるほどの存在でした。この会では自分史を語ることから始まり、読書会、テーマ発表などをしてきました。集まる場所がなく、メンバーの自宅で会を開いていたこともありました。1995年に「少女よ、起きなさい!」(インゲボルグ・クルーゼ著 新教出版社)の読書会を行いました。(タリタ・クムですね)その本の最初の登場人物がこの4人の娘でした。今からもう14年近くも昔に読んだ本ですが、この名も無き女性たちに、またパウロが教会の女性に対して、大変厳しく書いていることが印象深かったことを覚えています。

さて、預言に対してパウロはコリントの信徒への手紙I12章に、「預言する者は人を造り上げ、励まし、慰めます。預言する者は、教会を造り上げていきます。」と書いています。また、第1に使徒、第2に預言者、第3に教師と書いているように「預言をする者」を教会において重要な存在とみています。たった1回、しかも名前もない4人の娘ですが、わざわざ「預言をする」と書いてあったところを見ると、しかもフィリポの娘ということで高く評価していたと考えられます。蛇足ですが、フィリポは使徒言行録6章でステファノらと共に選ばれた「霊と知恵に満ちた評判の7人」の1人です。

さきほどの「少女よ、起きなさい!」から少し長くなりますが、引用します。

『主に洗礼を受けていない者たちを相手にのべ伝えを行った父フィリポとは異なり、

カイザリアの4人の預言者たちは、土地の信者団の魂の守護にあった。彼女たちは何か事が生じると、集まった信者たちに何をすべきか何をすべきでないか具体的に語った。

彼女たちは礼拝中、特別な職服をまとっていた。古代ローマの女性が外出する際にきたパラという外套に似た白い亜麻布の服を着たのである。頭は中近東の女性の間で今でも見られるように白い布で覆っていた。

コリントではしきたりが異なっていた。かの地では女預言者たちは礼拝中でも長い髪を人目にさらした。それが祈りへの集中を妨げるとパウロは感じた。柔らかな髪を見ると心が乱れる。彼女たちの姿を見つめながら、同時に彼女たちの言葉を一心に聞き入ることなどとても無理と思われた。彼だけでなく他の男も同じ思いだろう。

女預言者たちの髪を覆う白い布が忘我の境地にある彼女たちの預言を喚起する敬虔心に性的感情が混じらないようにするのにいかに効果的か、カイザリアで身を持って体験したパウロはコリントの信徒にこう書き送った。Ⅰコリント11:2-8 14:34 』

著者の私的感情(?)もこもっているかもしれませんが、髪の毛が長い私は叫んでしまいそうなことが書いてあります。

イエスの周縁にいたであろう女性たち、初代教会でも重要な役割を担っていたであろう女性たち。いったいいつから、周縁にもいられないほど遠くへ追われてしまったのでしょうか。そんなことを思いながらパウロ書簡を読むと、また新たな発見があるかもしれません。

参考：『パウロとコリントの女性預言者たち』

A・Cワイヤ著 絹川久子訳 日本基督教団出版局

## ジェンダープロジェクトより



### ◆「タリタ・クム10号」の記事について

2008年10月に発行しました「タリタ・クム10号」に掲載した「BOOK REVIEW10」について読者よりご意見をいただきました。それは、「ジェンダープロジェクトは性的少数者との連帯を課題としているにもかかわらず、書かれている表現・内容の一部は、日本聖公会における性的少数者のおかれている現状が理解されていないと感じられるものであり、大変残念である」というご指摘でした。この記事は、ジェンダープロジェクト発足当時から課題の一つとして挙げながらも取り組むことができなかった性的少数者の方たちとの連帯への足がかりとなることを願い、掲載したものでした。しかし、ご意見をいただいたことによって、これまでジェンダープロジェクトとして、性的少数者の方たちと出会うことなく過ごしてきたことにあらためて気づかされ、性的少数者の方がおかれている教会の中での厳しい現実を直接の声として聴くことなく「連帯を課題」としている自分たちの姿に気づかされました。また、あらためて文章を精査していく中で、私たちの中に刷り込まれた男女二分法の価値観やジェンダー規範にも気付かされることとなりました。このご指摘を受けた

ことに、最初はプロジェクト内で戸惑いがありました。しかし、意見をくださった方たちとの対話やプロジェクト内での話し合いを通し、その声に誠実にむきあい、これからの連帯のきっかけとすることが、ご意見をいただいたことへの大切な応答であると考えてに至りました。今後は、『タリタ・クム』を通しての情報の共有、また公開学習会などを企画しプロジェクトメンバー自身の勉強はもちろんのこと、多くの日本聖公会に連なる方々とこの課題について学び、一人ひとりの尊厳が大切にされる教会と社会の実現をめざしたいと思います。そして、このプロジェクトの働きは、誰のためにあるのか、何のためにあるのか、という原点に今一度立ちかえることができるよう、祈り求めています。今後とも、みなさまにご理解ご協力をいただくとともに、活動に対する忌憚のないご意見もくださいますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

### ◆今総会期のジェンダープロジェクト メンバー

ジェンダープロジェクトが発足して、4回目の総会期にはいりました。今期のメンバーは次の6名です。また課題により女性デスクとの協働で活動する予定です。どうぞよろしくお願いいたします。

小林聡司祭(京都教区) 金善姫聖職候補生(中部教区) 松村真理子  
(中部教区) 西原美香子(中部教区) 松原恵美子(大阪教区)  
大岡左代子(管区正義と平和委員・京都教区)



女性デスク：山野繁子司祭(東京教区) 木川田道子(京都教区)

---

**正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト**は、教会におけるジェンダー問題の共有と女性たちの新しいネットワークづくりのために、機関紙として、ニュースレター『タリタ・クム』を発行しています。(年3～4回発行予定) 女性の方々はもちろん、ひとりでも多くの皆様にこのニュースレターを読んでもいただけたら幸いです。

---

「タリタ・クム」というのは、「少女よ、起きなさい」という意味のアラム語です。会長ヤイロの願いにこたえて出かけて行き、死にかかっている幼い娘の手をとってイエスさまが言われた言葉です。(マルコ5：41) 今までジェンダーのために十分に発揮することのできなかった女性たちのさまざまな潜在的な能力や感性や行動力が、神様の祝福によって主の栄光をあらわすためにより生き生きと用いられまうようにという祈りと願いをこめて名付けました。

---

ジェンダープロジェクトの活動に関するお問い合わせ、また紙面についてのご意見は、下記にお願いいたします。

大岡左代子 Tel 073-422-0055 Fax 073-436-3333